吉備国際大学研究紀要
（人文・社会科学系）
第29号，141－160，2019

研究授業を見据えた大学教員の関わりが初任保育者に与える影響

―授業改善のためのアクションリサーチの一事例―

近江　望・中尾　道子*・高田　康史**・十良澤　成美***

The Effect of Experienced Teachers' Advice on Newly-Qualified Teacher's Instruction in a Kindergarten Classroom

Nozomu OHMI, Michiko NAKAO*, Yasufumi TAKATA**, Narumi JURYOZAWA***

Abstract

Children must be provided with sufficient opportunities to express their emotions and thinking while using body movement in their daily lives. However, it is not easy for teachers to provide effective instruction in the classroom, especially for new teachers and part-time teachers. A great deal of action research to support new teachers has been conducted in public elementary schools. Yet, these researches have not been sufficient for teachers who do not work on a full-time basis at kindergartens in Japan. This study focuses on a temporary, newly-qualified teacher, and examines how the instruction and advice of experienced teachers affects his or her instruction in the kindergarten classroom. This study was conducted in a public kindergarten from September to November 2018. This research used reflection meetings with a newly-qualified teacher and three experienced teachers after every activity with music and physical expression. Data were collected by filming during teaching time, taking notes at reflection meetings, and observing the newly-qualified teacher and the children. At the end of the study, the newly-qualified teacher's instructional ability improved through the process of having discussions with experienced teachers and writing teaching plans and reflection papers after meetings. The results imply that the process of accepting

吉備国際大学心理学部
〒716-8508　岡山県高梁市伊賀町８
Kibi International University
8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan（*716-8508*）
*　環太平洋大学体育学部
〒709-0863　岡山県岡山市東区瀬戸町観音寺721
International Pacific University
721, Kannonji, Seto-cho, Higashi-ku, Okayama, Japan（*709-0863*）
**　広島文化学園大学健康福祉学部
〒731-4312　広島県安芸郡坂町平成ヶ浜３丁目3-20
Hiroshima Bunka Gakuen University
20, 3, 3, Heiseigahama, Saka, Akigun, Hiroshima, Japan（*731-4312*）
***　目白研心中学校・高等学校
〒161-8522　東京都新宿区中落合4-31-1
Mejiro Kenshin Junior and Senior High School
1, 31, 4, Nakaochiai, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan（*161-8522*）

advice from experienced teachers, writing teaching plans, and using information from reflection meetings serves as an effective strategy to improve new teachers' teaching skills.

Key words：Physical Expression Activity, Teacher Training Program for Newly Qualified Teachers, Action Research, Early Childhood Education
キーワード：身体表現活動，初任者研修，アクションリサーチ，幼少期教育

1．はじめに

幼稚園教育要領の「表現」の領域では，感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむことがねらいの一つとして挙げられている。また，「健康」の領域では，自分の体を十分に動かし，進んで運動しようとすることが示されている。幼稚園や保育所の教育・保育において，幼児が音や音楽が聞こえてくると身体を動かして喜びや楽しさを表現している様子からは「身体表現」の発達が期待される。

また，保育の環境には，保育者や子どもなどの人的環境，施設や遊具などの物的環境，自然や社会の事象などがある。こうした人，物，場などの環境が相互に関連し合い，子どもの生活が豊かなものとなるよう，計画的に環境を構成し，工夫して保育することが求められる。

そこで，教育現場においては授業研究が組織的に実施され，より良い保育を目指し多面的かつ具体的に検討する機会が設けられている。木原(2009)は「授業研究は，教師としての自己の発見と再発見の機会であり，仲間との絆を深めるための仕組みであり，社会的要請に応えるためのシステムである。」[1]と述べている。また，教職員が研究に努めなければならないことは，法律によっても規定されている[2][3]。

さらに授業研究の実施だけでなく，その仕組みの中で教師の職能をより発達させるためには，どのような取り組みが効果的か考えていくことも重要である。特に初任者に対し文部科学省（2001）は，取り組むべき課題として「初任者が実践的指導力やコミュニケーション力，チームで対応する力など教員としての基礎的な力を十分に身に付いていないことなどが指摘されている。こうしたことから，教員養成段階において，教科指導，生徒指導，学級経営等の職務を的確に実践できる力を育成するなど何らかの対応が求められている」[4]と指摘している。

香川県教育センター（2013）では「若手教員の多くは，経験の少なさにより，授業における基本的な技術や，学級担任としての集団づくりなど，学級経営に関わる技量が十分に備わっていないこと」[5]を課題に挙げ手引き書「達人が伝授！」を作成している。

また，文部科学省（2001）は「複数の先輩教員が複数の初任者や経験の浅い教員と継続的，定期的に交流し，信頼関係を築きながら，日常の活動を支援し，精神的，人間的な成長を支援することにより相互の人材育成を図る，『メンターチーム』と呼ばれる校内新人育成システムを構築している教育委員会もある。」[4]「初任者研修と『メンターチーム』の取組を有機的に組み合わせることにより，初任者のより効果的な育成を図ることも考えられる。」[4]と紹介している。

これらの取り組みを参考にして，初任者にとって学級内で起こる様々な事柄をとらえ，課題をみつけ，その課題解決をめざしていくつかの行動の選択肢を計画し，実践してその効果や課題の修正・新たな課題をみつけ，改善を促進することを目指すためには複数の教員による支援体制が必要と考えた。そして，教材開発及びその改善の方法として，授業ごとに実

践者と研究者が検討を繰り返すアクションリサーチの手法が有効であると考えた。

中村（2017）は若手教員が直面する学級経営上の課題に学年団教員が協働的に取り組んだアクションリサーチの事例を挙げている[6)]。そこでは「こうした協働のプロセスにおいて，『改善協議』は，若手教員が自身の行動や思考様式の枠組みを問い直す契機となる知識や経験の組織化の装置として機能した」[6)]としている。しかし，改善協議を中核として若手教員の思考の枠組みの再構成を促したと考えられるアクションリサーチであるが，島田（2008）[7)]，國武（2014）[8)]，末吉（2015）[9)]，西村（2017）[10)]など小学校教員に対して行われたアクションリサーチの事例報告はあるものの初任保育者に対した事例報告は管見の限りみられない。

そこで本研究では，「表現遊び」の環境設定を工夫しながら，３歳児に対する「表現遊び」の教材開発をする研究授業を通して，３歳児学級の担任である初任保育者がどのように変容していくか，そこに支援するための外部者（大学教員）の関わりがどのような影響を与えるかアクションリサーチの手法を用いて検討していくことを目的とした。

２．研究方法

１）研究対象と調査方法

2018年９月７日～10月30日にかけて，K市立L幼稚園３歳児３名において行われた「表現遊び」の授業実践（全８回）と事後検討会（全８回）を研究対象とした。

３歳児学級の担任は，新任で常勤講師１年目のA担任（女性：教職歴６ヶ月）であり，初めての教員生活に戸惑いながらも，素直な態度で熱心に取り組んでいる。

初任保育者に着目した理由としては，９月27日と10月30日の２回，A担任にとって初めての研究授業が設定されており不安な気持ちを抱えていた。そこで，この研究授業を見据えて，同僚であるJ園長（男性，教職歴43年）・D主任（女性，教職歴16年）からの指導だけでなく，定期的に外部者（大学教員）２名の関わりをつくることで職能発達が促進されることが期待された。

表１　授業実践と検討会

回	月	日	曜日	取組	授業者・参加者
①	9	7	金	表現授業30分	A担任
				事後検討会	A担任/B教員
②	9	14	金	表現授業30分	A担任
				事後検討会	A担任/B教員/C教員
③	9	21	金	表現授業30分	A担任
				事後検討会	A担任/B教員
④	9	27	木	表現授業30分	A担任（研究授業者）
				事後検討会	A担任/B教員/C教員
⑤	10	12	金	表現授業30分	A担任/D主任
				事後検討会	A担任/B教員/D主任
⑥	10	19	金	表現授業30分	A担任/D主任
				事後検討会	A担任/B教員
⑦	10	25	木	表現授業30分	A担任/D主任
				事後検討会	A担任/B教員
⑧	10	30	火	表現授業30分	A担任（研究授業者）
				事後検討会	A担任/C教員
	11	9	金	事後検討会	A担任/B教員

＊第8回目の事後検討会は日程の都合上、C教員とB教員に分けて実施した。

関わりをもつ２名の大学教員のうちB教員（男性，教職歴20年）は事後検討会全てに参加して，A担任の思いや考えから課題をみつけ，改善を促す立場であった。C教員（女性，教職歴42年）は事後検討会に２回目・４回目と８回目の３回参加した。C教員はA担任とB教員による検討会の流れを把握しながら，今後の方向性を示唆する立場であった。

調査の方法としては，毎回の授業後，学習者の状況や授業観察の記録をもとに事後検討会を行い，授

業改善を意図したアクションリサーチを実施した。

2）実践内容

表２　表現遊びの実践内容

回	月	日	曜日	取組	授業内容
①	9	7	金	表現授業30分	タンバリンでリズムを楽しむ
				３歳児	粘土遊び・マット遊び
②	9	14	金	表現授業30分	頭にお面をかぶり動物になりきる
				３歳児	トランポリンでリズムを楽しむ
③	9	21	金	表現授業30分	カスタネットでリズムを楽しむ
				３歳児	ウレタンマット・体操マット遊び
④	9	27	木	表現授業30分	いろいろな動きでリズムを楽しむ
				３歳児	ウレタンマット・体操マット遊び
⑤	10	12	金	表現授業30分	多様な場でリズムを楽しむ
				３/４/５歳児	トランポリン・巧技台遊び
⑥	10	19	金	表現授業30分	多様な場でリズムを楽しむ
				３/４/５歳児	トランポリン・巧技台遊び
⑦	10	25	木	表現授業30分	多様な場でリズムを楽しむ
				３/４/５歳児	トランポリン・巧技台遊び
⑧	10	30	火	表現授業30分	多様な場でリズムを楽しむ
				３/４/５歳児	トランポリン・体操マット遊び

3）収集データ

(1) 学習者の状況

・毎授業時の映像撮影（新任保育者と園児の動きや様子などを記録）

(2) 観察

・授業観察者による園児の学習行動や仲間との関わりなどを状況関連的に記述分析したフィールドノーツ

(3) 授業者・観察によるリフレクション

・授業後に実施した授業者と観察者による授業検討会の逐語記録

4）授業ごとのリフレクション

収集したデータを参考に，授業実践の中で「今」「何が」起こっているのか明らかにし，授業に「変化」をもたらせていく検討会を毎授業後行った。

3．結果

1）事後検討会の過程

(1) 授業者・観察者によるリフレクションの概要

一日保育の中から，表現遊びの時間帯に絞って検討を行った。また，リフレクションでは授業者（担任）と観察者（大学教員）による議論の部分を取り上げ，授業者（担任）の変容を探った。

(2) 事後検討会における議論の要点

授業後の検討会は，以下の内容を中心に議論した。

・子どもの様子に関すること
・表現遊びの教材開発に関すること
・授業者としての指導に関すること

また，検討会では日々の実践や研究授業で同僚保育者からアドバイスや指導を受けたことをふまえ，観察者（大学教員）と共に初任保育者による「授業改善」に向けての視点を整理していった。

そこで本研究では，議論の中から初任保育者（A担任）の指導観が変容した部分を抽出する。そして，変容の様子に焦点を当て記述する。

検討会での用語

1．検討会参加者の表記
　…授業者（A担任）
　…観察者（B教員）
　…観察者（C教員）２・４・８回目に参加
　…観察者（D主任）５回目に参加
2．検討会の話題に挙がった園児の表記
　…３歳（E児・F児・G児）４歳（H児）
　　５歳（I児）
3．考察内容からカットしている会話
　…逐語記録の中で相づちやうなずき，話題に挙がっている園児の参加者間での確認など検討会の話題に直接関わらない会話

表３では，各検討会において議論された要点を挙

げた。この要点は，検討会での議論を通して授業者が納得し，その後の指導に改善点として取り上げたものとしている。この要点に沿って，議論の要点・発言・改善の順に各検討会の過程を記述する。

また，右欄には各検討会において検討され，次回に向けて授業改善へのポイントとなったことを挙げた。

表３　各検討会での要点・授業改善へのポイント

回	各検討会での要点	授業改善へのポイント
①	担任の思いと課題	担任が楽しそうに動く
②	教材のねらいについて理解	子どもたちの動きを見取る
③	指導方法について	声かけとシュミレーション
④	具体的な保育の展開について	取り組み方のイメージ
⑤	具体的な場の設定について	自分で活動の場を選ばせる 声かけのバリエーション
⑥	１０日後の子どもの姿について	目指す姿と声かけの具体案
⑦	個々への具体的な関わりについて	子どもたちへのきっかけ作り
⑧	仲間との関わりについて	子どもたちの関わり作り
	保育の質について	振り返りを同僚に伝えていく

２）事後検討会の流れ

(1) 担任の思いと課題

第１回：９月７日金曜日

（表現授業30分・事後検討会）

①議論の要点

登園した３歳児が３名中１名であった。教室にある音楽をかけてタンバリンを叩いて楽しむものの，そのうち粘土に興味が移り，授業後半は粘土遊びを楽しんだ。

初回の授業であったので，研究授業に向け，また表現遊びについての担任の思いと課題を中心に議論した。

②発言

（A担任）思い　その１

子どもたちの目指す姿として最後の最後に考えていることは，遊戯室でダンスフロアをつくって，そこで子どもたちの動物のなりきりダンス，みたいなものをできたら良いのかな，と思っています。３歳児としてのダンスを２ヶ月後にみてもらいたい。

そこで，授業前にアドバイスをもらった同僚保育者の意見を振り返った。

（D主任）問いかけ

（A担任は）踊りができる３歳児にしたいの。それとも体を動かす楽しさを感じられる３歳児にしたいの。

これを受け，担任には「リズムに合わせて体を動かす」ことを大切にしたい思いがあることを確認した。

そこで，再度担任の思いを整理した。

（A担任）思い　その２

ダンスが踊れる３歳児ではなくって，リズムに合わせて体を動かし，踊ることの楽しさと人前で踊れる自分に自信をつけてほしい。

しかし，踊れるようになるためにどのような指導が必要なのか明確ではなかったため，観察者から改善の視点を提案した。

③改善

（B教員）提案

・「○○させよう」ではなく「自分からしたい」という思いを大切にする展開を心がける。
・担任は指導観やネタの用意だけでなく，人的環境としてまず，担任が楽しそうに踊る。
・１人の反応をきっかけに楽しさが広がるように心がける。

指導で踊れるようにしようとするのではなく，子どもから「動きたい」という思いが出てくることを大切にして，まずは担任が楽しそうに動くことを確認した。

(2) 教材のねらいについて理解

第２回：９月14日金曜日

（表現授業30分・事後検討会）

①議論の要点

登園した３歳児は３名中２名であった。午前中につくった動物のお面をかぶり，交互に教室にある音楽をかけながらトランポリンを跳んで楽しんだ。

しかし，音楽はいろいろな曲に変わるもののトランポリンの上では一定のジャンプしか動きの変化がみられなかったことから，授業観察していたJ園長・D主任・C教員の意向を受け，B教員が授業後半の10分間に介入して指導した。その指導のねらいとしては「教室にない曲をかけて子どもたちの反応を探る」「動く環境をトランポリンだけでなく，フロアマットも用意して可能性を探る」であった。

表現遊びのねらいについてどのように理解していくかA担任とB教員・C教員の３名で議論した。

②発言

（A担任）表現遊びの取組

トランポリンを用意して，音楽を流したらどうなるか，を実際にやってみました。始めに童謡にどう反応するかみていたんですけど，童謡にはそんなに反応はなくって，ただ跳ぶという状態。

「エビカニクス」を流すとE児とF児が反応して，曲に合わせて跳ぶ姿だったり，歌詞に合わせて跳ぶ様子がみられて，E児とF児は「次は僕この曲やりたい」とか，自分たちから曲をリクエストしたり，自分たちでカセットを入れて流す様子がみられて。

そこで，授業前にアドバイスをもらった同僚保育者の意見を振り返った。

（D主任）アドバイス

動物のなりきりダンスをするなら，動物のお面をかぶって踊ったらいいのでは。

これを受けて，午前中「自分たちで描いたウサギのお面」で遊んだ後，午後はウサギになりきって跳ぶ活動となった。そして，この日に取り組んだ授業と子どもの様子を振り返り，次回の取り組みを確認した。

（A担任）来週の表現遊びの取組　その１

ダンスフロアかトランポリン・マットを用意し，お面で動物になりきり曲を流して踊ってみたい。

しかし，同時に表現遊びでの悩みも出てきた。

（A担任）悩み

トランポリンを30分も跳び続けるのはしないかな，と思っていたのでここまでやりたいというのは想定外でした。

（リズムに遊び込むのが予想外だったので）自分ではどうしたらいいのかわからなくなってきて，何も（次の指導が）できなかった。

そこで，B教員が授業後半の10分間に介入して指導した場面を振り返り，改善のヒントを探った。

（B教員）指導のねらい

・教室にない２曲をかけて子どもたちの反応を探った。

・動く環境をトランポリンだけでなく，フロアマットも用意して可能性を探った。

10分間の提案授業を受け，担任の気づきを振り返った。

（A担任）気づき

・初めて聞く曲でもリズムに乗って跳んでいる

姿がみれた。
・（いつもの曲とは）別の曲でも反応するのがわかって良かった。

さらに，C教員から今後の方向性を示唆する話が出た。

（C教員）動く・踊りについて
本当は動けるというか，もって生まれた，ちっちゃいから動ける。でもそれが出なかったところに，どう仕掛けるかな，というのが保育になってくるので。その最大のポイントはやっぱり先生で。３歳ぐらいの子だったら先生がモデリングしなきゃ子どもたちは動けないので。先生が踊らなきゃ。
跳ねているだけで，それだけで子どものテンションが上がって，動く。動ける子が動けるようになる。

（C教員）物的環境について
リズムって難しいので，そのためにトランポリンがある。本当は何にもない床の上でいいのだけど，子どもってそれはできないので，音楽に乗れないのでそのためにトランポリン。トランポリンに乗ると自然に跳ねるじゃないですか。これがリズムなので，それが物的環境になる。

（C教員）選曲について
曲も子どもたちが自由にかけていけばいいのだけども，いろんな曲調のいろんなものをつぎはぎして，それをずっと流したらどうかな，と。で，子どもたちがあっちの曲が良いよ，っていったときに変えてやれば良いと思うのですけど。

（C教員）動く環境について
L幼稚園は人数が少ないので先生がいろんなものを出してやる。で，そうやると自然に，本来の自然に動く子どもがみえてくるだろうと思う。
で，できれば関わっていくのに下のマットや下のステージを使いながら先生がいろんな動きをしていくとそっちへそっちへ流れていくので，できれば最終的にはトランポリンの下でみんなが踊れるようになるといいかな，と思います。

③改善
B教員とC教員による話を受け，A担任は次回に向けての取り組みを整理することができた。

（A担任）来週の表現遊びの取組　その２
・教具はマットやトランポリンを用意する
・慣れ親しんだ曲・新しい曲，いろいろな曲をかけていく
・マットでどういう動きをしたいのかみていく

２名の大学教員による関わりによりA担任の授業改善に向けた意識に変化がみられたため，さらにB教員から以下のような提案がされた。

（B教員）振り返りレポートの提案
今日の振り返りを文章にまとめ，今後に生かす。
「事後検討会の後，担任自身の振り返りを行い授業改善のポイントを担任自身で整理していく」
（１）気づいたこと・学んだこと
（１-①）表現教材について
（１-②）保育者としての視点について
（２）今からしたいこと
（２-①）表現教材について
（２-②）保育者としての視点について

これにより今後，事後検討会を終えて，A担任自身が気づきや指導方法について振り返る作業を行っていくこととなった。

(3) 指導方法について

第３回：９月21日金曜日

（表現授業30分・事後検討会）

①議論の要点

登園した３歳児は３名中３名で初めて全員が揃っての授業であった。今まで教室になかった新しい音楽に合わせてカスタネットを鳴らし，体を動かして楽しんだ。そして，活動の場に体操マットとウレタンマットを敷いたことで，ジャンプだけでなく転がるような動きもみられた。

しかし，授業中盤で興味が薄れたのか小部屋の中に入り込み，休憩をしたりおもちゃ遊びをし始める２名がいた。この場面を含め，表現遊びでの指導方法について主に議論した。

②発言

（A担任）表現遊びの取組

声かけの工夫であるとか，トランポリン以外の場所の設定とかの工夫をしてきました。初めてのウレタンマットで子どもたちも新鮮でした。トランポリンとの違いでウレタンだったら寝転んで回るとかの動きがみられたりとかしました。

曲については，ディズニーの曲・民族的な曲には反応しなくて，（B教員が作成した）CDの曲だと「何番の曲が良い」とか「この曲おもしろい」とか反応してピョンピョン跳んでたりしていました。

（A担任）子どもたちの様子　F児

F児が「先生，みて」といって体操マットの上でダンサーみたいな動きをしていて，「すごい，かっこいい」っていったらすごいうれしかったみたいで，今日もその動きが何回もみれた。トランポリンを出さなくてもマットだけでもああいう動きができるんだな，と思いました。

（A担任）子どもたちの様子　E児とG児

E児とG児は前は初めての環境でテンションが上がってずっとしていたんですけど，途中からちっさい部屋みたいなところで折り紙で遊ぶ姿がみられて，今日はそういう気分じゃなかったのかな，って。あのときどういう声かけをしたらE児もG児ももっと楽しんで踊れたか，音楽に合わせて体を動かせたのかな，って自分の中の課題と思いました。

（A担任）声かけについて

今日は声かけをがんばろうと思って。E児はほめてあげるとすごいがんばってやるっていうのがわかったというか。E児は自己肯定感が低いからこそ今まであまり踊れなかったと思うので，ほめてあげたら何回も「先生みて」って繰り返ししていたから，本当にほめてあげる声かけを自分の中ではがんばったんですけど，この声かけで良かったのかな，とか，別の声かけがあったんじゃないかな，とか終わった後に反省とかあって。

（A担任）誘い方について

E児とF児があっち（小部屋）に行ったときに「自分の対応があっていたのかな」とか「自由に遊ぶ，折り紙させるだけで良かったのかな」と，もうちょっと誘い方の工夫とかも必要なのかな，と。

リズムを楽しんでさせたいのであったら，ねらいから外れているというか，している気が自分の中でするんで，誘い方だとかもっとできたのかな，と思いました。

そこで，活動の場や音楽に変化をつけていくことで動きに広がりがみられたことを成果にとらえながら，A担任が意識している「声かけ」により，興味

が離れたときにどのように誘い，指導していけば良いのか議論した。その中で，改善に向けて要点を整理した。

（A担任）決まったダンスを踊らなくても良いというか，自由な踊りをさせることが大事なのかな。一番は踊らせようとしないこと，ですかね。
　先生方のアドバイスで，自分が踊るようになったら自然と入るようになったんで，踊るっていうのはまずは自分が楽しんでやること。子どもも自然と来てくれて，一緒にやってくれる。
（B教員）踊らせようとしていないのに踊るようになっている。踊らせようとしないほど踊るようになっていった。
（A担任）踊らせようとしていた，結局決まった振付をさせようとしていたので，なんかそれを取っ払ってしまったら自分の自由な動きをしたら，ってなると気持ちが楽になった。
（B教員）踊るのをやめて小部屋に入ってしまった子どもたちに対してどうですか。
（A担任）そこはすごく葛藤がありますね。糸口は何も思いついていないんです。

　そこで，この解決への糸口についてどうしていくか考えていった。

（A担任）自分のねらっているものはあるけれども，子どもが違う反応をされると，そのときの対応というか臨機応変な対応をどうすれば良かったのか，とかそういうようなものはあります。
（B教員）指導案を書いていくと，予想外の動きが予想できる。これを書くときにさせることのポイントで書くのか，予想を書くのか，それを考える時間じゃないのかな。できる限り想定をする。
（B教員）週末に文字起こしというか，自分の中で整理して，これが気づいた，これが学んだ，だから次こうしようと思う，みたいなことを文章にしておくことはすごく大事で。本来，それが指導案。

③改善

　検討会では指導案と振り返りを文章にしていくことの大切さを確認した。そこで事後検討会後のA担任の振り返りレポートからは

・どうしたら子どもに音楽をかけたらマットで楽しく動かすのか考えていく
・認める声かけをしていく
・予想外のシミュレーションをする
・指導の立ち位置を考える

という指導方法とその課題が４点挙げられた。

（4）具体的な保育の展開について

第４回：９月27日木曜日
（表現授業30分・事後検討会）

①議論の要点

　本時は園内研修として３歳児保育の研究授業であり，10月30日に計画されている研究授業の中間発表としての位置付けにもなっていた。
　これまでの取り組みを整理して，体操マットとウレタンマットの上で子どもたちが選んだ音楽に合わせて動くことを楽しんだ。しかし，踊り終わりの決めポーズを考えたり，跳ぶ以外の動きをみつける中で，トンネルくぐりなどマット遊びの要素がみられ，リズムに合わせて表現遊びをする動きは薄れていた。
　そこで，音楽に合わせて全く動けなかった３歳児が楽しく動けるようになった行動面の成長だけでなく，子どもたちの気持ちを読み取りながら，今後の成長に向け，どのように保育を具体的に展開していくのか，A担任とB教員・C教員の３名で議論した。

②発言

（A担任）表現あそびの取組

リズム遊びについて，１学期E児とF児は全く動けなかったので，今日はたくさんの方がみに来られていて動けるかな，という不安があったのですが，それを超えるような動きをしていて，G児も楽しそうにしていて，いろいろな動きをみせてくれたりだとか３人が楽しそうに踊っている姿をみていただけたことがすごいうれしかったな，と思っております。

楽しく動けていて良かったというA担任の振り返りに対し，B教員から次への課題が提案された。

（B教員）次への課題

トランポリンをすればいい，ウレタンマットですればいい，つまり道具（の扱い）がねらいになっている。トランポリンを使って，ウレタンマットを通じて最終的にどこがねらいか，とか，３歳児の３月はどこを目指すかというところがA担任にとっては遠い話なんで，10月30日今から１ヶ月，これができると良いよね，というのが現実的かな，と。

１ヶ月後，今日の３歳児をみたときにこんな姿にいけるんじゃないの，そこにアプローチの仕方でどんな教具があるかな，ウレタンマット以外のものは何が必要かな，って具体的になるかな，と思います。

しかし，今後の展開について担任からは以下のように具体的な保育の展開については明確ではない様子がみられた。

（A担任）表現あそびの目的

・強制させずに踊れるようにするにはどうしたら良いか，というのが第一の目的であった。
（しかし，どうしたら子どもたちが踊る楽しさを感じられるかな）
・友だちとか先生と楽しんで踊ってほしい。
（しかし，こういうことがしたい，とか具体的には思いついていない）

そこでB教員からは具体的な保育の展開については二つの提案がされた。

（B教員）二つの展開

二つの道がある。

一つはできるだけフロアにしてしまう。トランポリンやマットもなくして体操マットへ，さらにマットもいらないぐらい。自由な広いフロアの中で跳んでもいいし，回ってもいいし，転がってもいいしという。そこでいろんな動きがみつかる。最終的にフロアというのが自由な動きができますね。逆にトランポリンの上は制限されますね。

もう一つの道は，音が鳴っている，そこにはビートがあったり，小節があったりするので手を叩く。自分で音楽を感じて手を叩くかもしれないし，２人揃って手を叩くのが揃って音楽遊びとして楽しい。そういうのが生まれる。手拍子だけじゃなくて，万歳を２人同時にできた。それが音とリンクしている，という音に焦点を当てるのももう一つの道かな，と。

また，C教員からは子どもたちの様子を読み取ることの大切さについて話が出た。

（C教員）洞察と相互作用

保育者の仕事は洞察と相互作用。

子どもが今どういう状態にあるかみなきゃいけない。読み取るというのが一番の仕事。全体の読み取りと個の読み取りがすごく大事ですよね。

（C教員）洞察と働きかけ

遊びを先生が楽しめるかどうか。

楽しみながら，もっとやってほしい遊びだとか，もっと発展させてほしい動きだとか，そういうものを出さなきゃ，子どもたちは弾むしか知らない。

子どもたちにこの道具を使ってもっと引き出したいもの，もっとヒントを与えたいものを先生が言葉でいったり，強制してやりなさいというのではなく，それを先生がすることによってモデルになっていく。そういう一緒にやってくださいね，という意味。それが洞察と働きかけのあり方。

（C教員）声かけについて

働きかけには子どものもっているものを引き出すという声かけだとか，もう一つは３歳児は基本自己中なので自分しかないんです。なので１人でやっていてもかまわないんですけど，そこにつなぐという声かけ。

子どもから出るときに，先生が声かけをやってしまうと子どもから出ないので，子どもから出るかどうかの読み取りがすごく大事。そのときは待たなきゃ駄目。

③改善

これらの検討をふまえ，A担任が今後取り組みたいことを整理していった。

（A担任）取り組みたいこと

・部屋だけではなく，外でも踊れるようにしたい。（しかし，どのように取り組んでいったらいいかは何も考えていない）

・４歳児５歳児とも一緒になって体を動かせたら。

取り組み方のイメージとして室外のテラススペースで踊ることが出てきたため，その環境を指導者が設定することが大切ではないことを確認して，以下のようにB教員から提案がされた。

（B教員）

・テラスで踊らすことはゴールではない。

・３歳児が楽しく踊っている姿をみんなにみてもらいたくなり，その場を探したらテラスだった，というイメージ。

事後検討会後のA担任の振り返りレポートからは

・どのような工夫が必要か

・調べながら考える必要

・声かけ

が挙げられた。

しかし，検討会の中の発言に２回出てきたA担任の「こういうことがしたい，とか具体的には思いついていない」「どのように取り組んでいったらいいか，考えていない」という部分や「本やネットなどから調べながら考える」という振り返りから，具体的な取り組み方や保育のイメージが明確になっていないようにもとらえられる。この点については，次回への課題として整理された。

(5) 具体的な場の設定について

第５回目：10月12日金曜日

（表現授業30分・事後検討会）

①議論の要点

前回の研究授業を受け，今後は３歳だけではなく４・５歳児も一緒に表現遊びを行うことになった。理由としては，４・５歳児担任であるD主任も指導に関わりながら表現遊びの方向性を探ることが検討されたためである。また，A担任の悩みとして具体的な取り組み方や保育のイメージが明確になっていない部分もあり，４・５歳児担任（D主任）による指導により取り組み方のイメージがみえてくることも期待された。

表現遊びとしては，３～５歳児の園児全員が関わることもあり，研究保育のテーマである「宝島遊び」を生かして「宝島」を見立てた活動の場が用意された。

前回から大きく変化した活動の場の設定についてA担任とB教員・D主任の３名で議論した

②発言

まずはD主任から新たな場がどのようにつくられたか説明がされた。

（D主任）今週の取組

室内の巧技台を子どもたちなりに組み合わせて遊んでほしいと思って，昨日の朝準備しました。大きな積み木を１個だけ私が運んできて，巧技台と連結させたんです。それをみたH児がどんどん積み木を運び出したんですね。そしたら巧技台だけでなく，組み合わされた積み木の上を歩くとか，積み木からトランポリンめがけて跳ぶとか，そこからさらにマットの上に跳ぶとかいろいろな動きを子どもたちが考えてやり。

音楽の好きなI児が「これをかけたい」っていって音楽をかけると最初はフロアで踊っていたんですよ，そうするうちにステージが移行していって巧技台の３つの島で踊る子が出てきたり，積み木のスペースで踊ったりっていうのがみられたので，ほんとここ２・３日です。

運動遊びの場がつくられたときに音楽がかかることにより，自分の踊りたい場所を選んで取り組む様子がみられた。

（A担任）表現遊びの取組

３歳児も（４・５歳児と）一緒に踊っていて，周りの影響とかもあるんだろうな，と思って。4・５歳児と一緒に踊っているのは成長だな，と思う。

園児全員の共通テーマである「宝島」の場づくりをすることでスムーズに３～５歳児が関わり合って活動する様子につながった。

（D主任）今後の取組について

子どもたちの姿からテラスで踊ると思っていたけど，今日の子どもたちの様子をみていると，日頃から馴染みのある保育室で，毎日楽しんでいる巧技台の上で，しかも自分で曲を選べるっていう環境がベストかな，って思います。

当初，野外のテラスにダンスステージをつくる提案もあったが，巧技台などの場を自分たちで選びながら踊る姿を目指していく意見が出た。

（B教員）声かけの工夫

３つの島やトランポリンや体操マットがダンスステージだよ，っていうのはこっち（教員）の声かけ次第かな，と思います。

実は物を変えていくよりも，教師が何をほめたり気づいていくかで子どもは変わっていくのでは。それは誘導でもないし，どこに評価を置いてあげるか，ということやと思う。

そこを明確にしてあげるとA担任が３歳児に声をかけるポイントとD主任が全体に対してみているポイントが合わさってくると３歳児がより動きやすくなるのではないか，と思います。

また，場を設定して誘導するのではなく，声かけの工夫次第で自ら踊る場所をみつけ始めるのでは，という意見も出た。

（A担任）新しい場から考えたこと

３歳児の４・５歳児との関わりを大切にしていきたい。

わざわざダンスステージをつくらなくてもいいのかな，と思いました。わざわざこちらからつくらなくても，子どもたちがつくるんだな，って感じです。

そして，前回までは「外でも踊れるようにしたい」とも考えていたA担任も，自分で活動の場所をつくり，選んでいくことに理解を示した。

③改善

これらの検討をふまえ，A担任が今後取り組みたいことを整理していった。

> （A担任）取り組みたいこと
>
> 声かけのバリエーションのために，３歳児３人がどういうふうに表現しているのか，もう一度把握するというか，そういうことが必要なのかな。

改善のポイントとしては，D主任も交えて「自分で活動の場を選ばせる」ことを確認するとともに，「声かけのバリエーション」というキーワードが上がった。

> （A担任）大事にしていきたいこと
>
> 子どもたちがどういうことに興味をもっているのか，まだ聞き出せていないところがあるので，そこを明確にしないとまだわかってはいないです。

事後検討会後のA担任の振り返りレポートからも「子どもが何に興味をもって何をみているのかを把握する」「３人それぞれに声かけのバリエーションを増やしたり，変えたりする」「問いかけ型で子どもを誘導する」など声かけについての課題も意識されていた。

(6) 10日後の子どもたちの姿について

第６回目：10月19日金曜日

（表現授業30分・事後検討会）

①議論の要点

登園した３歳児が３名中１名であったが，４・５歳児も集まってきて表現遊びを楽しんだ。巧技台などでつくった「宝島」の場に集まり，自分たちで音楽を選びながら踊る場所を探し動き出した。

研究授業があと10日後に予定されていることもあり，そこを表現遊びの一つのゴールと定め，10日後の子どもたちの姿について議論した。

②発言

A担任による本時の振り返りは以下の通りであった。

> （A担任）表現遊びの取組
>
> ３歳児は（踊りや音楽よりも）巧技台に気持ちが向いていて，どうやってリズムに向かせるのか考えたのですができなくて。好きな音楽をかけてトランポリンで跳ねていたりとかはみられました。
>
> 自分が問いかけ方の声かけを意識して今日はやりました。

そして，声かけのバリエーションについての課題をさらに考えていくと定まっていない点が挙がった。

そこで，B教員から前回の振り返りを受けて，以下の２点について考えていくことが提案された。

・10日後（研究授業）の子どもたちの姿

・声かけの具体案

> （B教員）声かけの視点
>
> 自由に踊れる姿にはなったので，そこからどのような姿を求めるかで，声かけも決まる。

そして，どのような姿を求めるか，A担任自身の中にみつからないときは同僚教員やB教員と一緒に探していくことも提案した。

そこで，一例として音楽が鳴ると自分なりの自由表現ができるI児を振り返り，彼の良いところから考えていくことにした。

> （B教員）求める姿の探り方
>
> I児の良いところを３歳児に聞こえるようにほ

める。そして，I児の良いところを担任がわかっていたら，ほかの子がしたときにほめれるよね。そのために，I児の良いところは何かいえると具体的だよね。

これにより，A担任はI児の良いところについて考え始めた。

（A担任）声かけについて
足を上下に跳んでいると同時に，上で手も動く。かっこいいなあ，すごいなあ，とは思います。
フロアでも自由な動きがある。

このように具体的にほめるポイントを確認することで，声かけの具体例が明らかになってきた。

また，検討会の後半では10日後（研究授業）の子どもたちの姿を改めてA担任は考えていった。

（A担任）10日後の子どもたちの姿
最初からサンバとかそういう曲・踊りをさせようとしていた感じが自分の中でしてて，子どもが「ラーメン体操」からの，その前に踊ったこと（振付）が次のサンバとかメケとかに生かされるというか，それも子どもが自由に踊るということなんだ，と。最初はほぐすというか，そういうのも意図的にするのも良いのかな，と。次に子どもたちの踊りたい曲を選ぶとかができたらいいのかな，と。
そのときの声かけとして，自分も楽しんで踊ったりとかしながら，全体をみてその子のしていることをリピートしたり良いところを認める。

③改善

10日後の子どもたちの姿について，目指す姿と声かけの具体案がまだ具体的でないことからB教員から以下の提案が出た。

（B教員）検討会後の新しい課題
・（10月30日に向けて）当日の指導案（略案）をつくる
・３～５歳児の個別表をつくる
これをもとに同僚教員からアドバイスをもらう

A担任が毎週末取り組んできた指導の振り返りレポートに代えて，研究授業当日の授業の流れを整理しながら，子どもたち一人ひとりの様子を振り返る。それにより事前に声かけのバリエーションをもっておくことができるのではないか，という考えから取り組むこととなった。

（7）個々への具体的な関わりについて

第７回目：10月25日木曜日
（表現授業30分・事後検討会）

①議論の要点

第８回目の研究授業に向けて「表現遊び」の最終授業であった。場の設定と流れは子どもたちの中で定着してきてはいるものの３歳児３名のうち１名の興味が薄れ，良い動きがみられなかった。

そこで個別表の作成を受け，個々への具体的な関わりについて議論していった。

②発言

授業前に作成した個別表をもとにA担任は声かけを意識して取り組んだ。

（A担任）声かけ
今日は子どもたちを自分なりの分析をした上で，どういうふうに声をかけるかなどを意識していて。
F児は月曜日，サンバの曲で自由に踊っていた。それをもう一度みたいな，という気持ちで月曜日にあったことと関連する言葉を言っていたりしたら，途中体操マットの上でクルクル回ったり，ダンサーの動きとかしたりして，月曜日は

フロアだったんですけど，体操マットからそこからフロアに行く声かけができなくて，頭の中がいっぱいいっぱいのところがあって，できなかったのが反省点で。

声かけにおいてはうまくいかなかった点もあったが，個別表をつくることで，具体的な関わりについて振り返ることができた。

これについてB教員は以下のように整理した。

（B教員）個別表の意味

（今までは）どんな声かけをしたら良いのかを教科書に求めていたのではないかと。マニュアル探し。この場面で子どもにどういう対応をしたらいいのか答えを探しているという。

個別表があると自分の信念というか，自分の思いで「この子はこういうことができるはずだ」と，なんとかできる力があるんだからきっかけづくりになってあげようという気になってくる。

また，指導案（略案）を作成したことの成果も検討した。

（A担任）指導案の成果

指導案の出だしの「ラーメン体操」をしなかったのは，園長先生に指導案をみせたときに「それは違うんじゃないかな」といわれて，「U.S.A.」に変えたんですけど，「やっぱり違うね」っていわれて，「じゃあどうしようか」といわれて，「今までやった曲を流したらどう。」といわれて「子どもの反応をみてみようと思います」ということに。

この園長先生との関わりについてB教員は以下のように整理した。

（B教員）指導案の意味

それはたぶんこの紙（指導略案）があるからできたことで，これをつくることが，「私こうしようと思うんです」ということを周りの先生が突っ込みやすいというか，今までは答え探しを外に求めていた。これ（指導略案）は自分の中から出てきている。

このように個別表と指導略案を担任の視点から作成したことで個々への関わりや教材の選択について具体的に振り返る姿がみられた。

③改善

これらの検討をふまえ，A担任が次回取り組みたいことを整理していった。その中で一番意識していきたいことを改善点にしようとした。

（A担任）一番意識したいこと

誘い方。子どもたちにどういう誘い方をしたら良いか，誘い方の意識というか。

それを受けて，B教員は「きっかけづくり」を改善点と提案した。

（B教員）きっかけづくり

子どもたちの興味を動かす，って感じね。動くかどうかは本人の意思やけど，動かすきっかけを，誘い方を考える感じ。

子どもの興味をくすぐるというか，本人がそれに反応するかどうか。

興味を動かすきっかけづくり，これが一番ちゃうかな。ダンスがしたくなるきっかけづくり。

きっかけづくりを先生がどれだけできるか。

そして，研究授業に向けての最終準備としてB教員は第５回目の授業風景を振り返ることも提案した。

（B教員）D主任の声かけ

第５回目の授業でのD主任の声を全部拾ったらどうだろう。D主任が子どもを盛り上げていたり，

手をつないで踊ったりとか，そのセリフを全部書き上げて，そのセリフをいえば良い。

D主任の行動を追っかけて，それを使う場面が出てくるからその通りやれば良い。

一回それを書き上げる作業をしておけば子どもが変わるのでは。

そのほうが変に難しくなって，気づいたら言葉が出なくなったりとかよりもD主任の声かけを取り上げる。

これはコピーをすることではない意図がある。

（B教員）D主任からの学び

D主任の声かけを真似る。そしたらこれだけ勉強してきたから，自分の思いがあるから，絶対完全コピーにはならんと思う。D主任はこういったから，それを使っても良いし，「この場面は，ちょっと違う言葉で私はいいたくなりました」というのが結局は自分の言葉だと思うので。

A担任は「きっかけづくり」を意識しながら，同僚保育者のD主任の指導方法を学ぶことになった。

（8）仲間との関わりについて

第８回：10月30日火曜日

（表現授業30分・事後検討会　前半）

①議論の要点

本時は園内研修として３・４・５歳児保育の研究授業であり，本年度の研究発表の位置付けであった。３歳児担任であるA担任が指導の中心となり，子どもたちが選んだ曲をかけ，自ら踊る場を選んで楽しむ活動となった。

事後検討会では園児全員が参加する表現遊びのため，仲間との関わりについて議論した。

②発言

（A担任）選曲について

この曲が良い，とかの言い合いもあったけど，話し合って，私も少し言いながら，みんなで考えて「この曲にしようか」とか言い合えたのは良かったのかな，と思いました。

子どもたちが曲を選ぶだけでなく，仲間と関わりながら選んでいく場面の大切さに気づいていた。

（A担任）きっかけづくり

（３歳児）３人で遊ぶっていう姿がみられなかったので，もう少しきっかけづくりであったりとか，４・５歳さんと自分から関わる姿を少しつくれるようにきっかけをつくることが大事だったのかな，というのが反省点です。

また，園児全体へのきっかけづくりはある程度成果がみられたものの，３歳児の良さを全体に広げていくきっかけについて，今後の課題にとらえることができた。

そこで，C教員から発言があった。

（C教員）ゴールを描く

カリキュラムの中で年間通じて活動・遊びの配分を考えていくこと。そこにゴールを描けているのか，が大事。この遊びで何を育てたいのか，なぜこの遊びを選んだのか，どういう見通しをもっているのか。遊びの目的は子供の成長なので，その姿を描くことが大事なんです。

（C教員）育てたい力

育てたい力を伸ばしていくには，遊びを設定していく中に，「遊び込む」姿を想定することなんです。子どもは「遊び込む」から大きな成長がある。単に遊びが好きという表面的な姿ではなく，その中で何を楽しみ課題はどこにあるか，「遊び込む」姿から，より深い所をとらえなければ子供の成長を導くことはできない。

（C教員）教師の立ち位置

教師がどう関わるかによって，主体的に遊びに取り組み，夢中になって遊び込む姿がみられるかどうかが決まるんです。そこで，教師の立ち位置としては，①イメージをもたせるための援助②関係をつなぐための援助の工夫が大切ですね。たとえば，子どもの思いをつなぐ，子どもとモノをつなぐ，子どもと子どもをつなぐ，遊びと遊びをつなぐなど，それぞれの場面で，導く・見守る・参加する・共有する･共感する・寄り添うなど，教師として，共同作業者として，演出家として，様々な立ち位置を工夫することが大切です。

③改善

仲間との関わりに対して振り返ると，子どもの様子に対して，つい声をかけ，手を差し出してしまっていたA担任であったが，子どもたち同士の関わりを見守りながら，遊び込むきっかけをつくる難しさを感じたようである。しかし，個別表を作成したことにより，一人ひとりに合わせた声かけやきっかけづくりをしようとした姿はみられた。

ゴールを描けているか考えていくと，第６回授業の後から作成した指導案によって，目指すべき姿を明確にしてどのような環境をつくって見守っていけば良いのか，A担任の考えがわかるようになった。

(9) 保育の質について

第８回：11月９日金曜日

（事後検討会　後半）

①議論の要点

第８回目の検討会の後半として，A担任とB教員で研究授業に向けた２ヶ月の取り組みについて振り返りを行い，初任保育者が研究授業を通して保育の質について向き合った点について議論した。

②発言

（A担任）保育の質について

力がついた。いい経験をさせてもらったな，と思います。２ヶ月の中で，先生方のアドバイスとかで本当の保育の質がみれて，ここまで深いんだ保育って。教育ってここまで深いんだって。

子どもの外見だけでなく，内面をみて引き出していくっていう難しさも感じられたけど改めて先生ってすごいんだって感じられました。

（A担任）具体的・内面的について

ただ　跳んでいる楽しさでなくって，子どもが跳んでいる姿のところで何をみているのかな，と思って。

具体的な内面的なところを少しずつみれるようになってきたのかな，と思います。

A担任は子どもの内面をみれていなかった，と振り返り，子どもの内面に寄り添っていく大切さに気づいた。

また，検討会後の振り返りレポートや指導案・個別表の作成についても振り返ると以下のような発言があった。

（A担任）振り返りについて

自分自身を振り返れて，「今回はこれが駄目だったんだな，じゃあ今度はこれがんばらないといけないんだ」と明確になったんでやりやすかったです。

そこで，毎回の振り返りレポートや指導案（略案）・個別表を作成する提案への思いを改めてB教員は話した。

（B教員）内面との向き合い方

自分の振り返り，来週どうするか。（すでに作

成していた）指導案・週案と違って，もういっこ内面。指導者自身の内面に向き合ってほしかった。

そして，その作成したものに対して同僚教員との関わりについて振り返った。

（A担任）同僚教員との関わり

（同僚の）先生は（毎回の振り返りレポートや指導略案・個別表を）みてくださって，ダンスをしている様子をみて，「もっとこうしたほうが良いのではない」と言ってくださって。

指導案については「ここは違うんじゃない」とか，「ここは良いと思うけど」と終礼のときに教えてくださって。

自分も忙しく，先生方も忙しいので，聞けない言えないところもあったんで，それは言ってくださったので良かったと思います。

（研究の）前半は自分の思いを出せなかった。受け身だった。

同僚教員との関わりについて，B教員は以下のように同僚教員の思いを考えた。

（B教員）同僚教員の思い

口に出せなくも振り返りレポートを出せば「ちゃんと考えたんだな」って，「言葉に出なくても頭の中で考えていたんだな」と文字になって形にみえると評価がしやすい。

そして，最後にB教員が想像する研究授業における初任保育者の心情を伝えた。その対話を以下にまとめる。

（B教員）自分のことを口に出すか，文章に出していかないと保育じゃない，という感覚あるよね。

（A担任）ありました。

（B教員）自分の思いをださずにずっと来ていたらどうなっていただろう。

（A担任）だんだん苦しくなっていくんだろうなあ，って。自分はこうしたいんですけど，って言えないままでずーと。

③改善

今回の研究では指導者の内面に向き合うために「毎回の振り返りレポート・指導案・個別表」という取り組みが検討会を重ねることで始まった。子どもたちの内面をみていく大切さをA担任は気づくとともに，自分自身の内面をみていく振り返りの大切さにも気づいた。

また，その振り返りによって同僚教員との関わりを深めることもできた。自分の思いをうまく出せずにいた苦悩も明らかになることで，振り返りを文章にまとめていくことの成果はA担任自身も感じることとなった。

４．考察

本研究では，３歳児に対する「表現遊び」の教材開発をする研究授業を通して，初任保育者がどのように変容していくか，そこに支援するための外部者（大学教員）の関わりがどのような影響を与えるか，アクションリサーチの手法を用いて検討した。

毎回の授業後には，収集したデータを参考に，授

表４　各検討会での要点・変容に向けての取組

回	各検討会での要点	変容に向けての取組
①	担任の思いと課題	無し
②	教材のねらいについて理解	B教員の指導と検討会を受けて、担任自身による振り返りを行う
③	指導方法について	担任自身による振り返り
④	具体的な保育の展開について	担任自身による振り返り
⑤	具体的な場の設定について	D主任の指導と検討会を受けて、担任自身による振り返りを行う
⑥	１０日後の子どもの姿について	研究授業（8回目）授業に向けて、指導略案と個別表を作成する
⑦	個々への具体的な関わりについて	D主任の声かけを取り入れる
⑧	仲間との関わりについて	
	保育の質について	

業に「変化」をもたらせていく検討会を行った。８回の検討会での要点は表４に示した。さらに初任保育者変容に向けて取り組みが行われた部分を表４の右の欄にまとめた。

特に今回の授業研究で新しく取り組まれたものは，２回目授業以降に毎週末行われた「振り返りレポート」と６回目授業から作成された「指導略案と個別表の作成」である。

この取り組みについては，検討会において授業者（担任）と観察者（大学教員）で確認をしていったものである。研究授業に向けて同僚教員と共に教材研究や指導案作成は行っていたが，授業が始まると改善へのポイントが次の授業に反映されない部分があった。例を挙げると，「声かけ」について毎回，指導者は意識するものの最終授業まで「声かけ」について検討されるなど，教材開発の視点ではなかなか指導の変化がみられなかった。

そこで観察者である大学教員が，検討会の振り返りを授業者自身がレポートすることを提案した。日頃の保育について同僚教員と検討してきているものの初任保育者にとって検討された内容をどの程度理解できていて，どのあたりを改善できるのか，理解度を知る必要がでてきた。

それにより，「保育の質のとらえ方」や「指導案をつくる意味」「自分の思いを伝えること」などに理解のズレがあり，より具体的な取り組み，初任保育者がイメージできる活動内容を検討することとなった。例を挙げると，「声かけ」について「D主任の声かけを真似して取り入れる」など，より具体的な取り組みをすることとなった。初任者にとってこのような“良いモデル”となる指導や保育をみることは，指導技術・保育技術を高めていくためにも非常に重要であると考えられる。

さらに「指導の振り返り」や「指導案・個別表の作成」は授業研究において教育現場では行われているものであるが，今回の研究において改めて大切な取り組みであることが確認された。さらに，その取り組みに授業者自身が「検討会の理解を自身で確認すること」が必要であった。これは外部者が関わり，授業研究の取り組みを同僚教員からの支援を生かしながら授業者がどのように自分の教育活動に反映させていけば良いのか，継続的に寄り添い，共に考えていったからこそみえてきた部分といえる。

文部科学省は新規採用教員に対し，実践的指導力と使命感を養わせるため初任者研修を実施している。この研修は新任教員に対し，指導教員と校内指導教員が配置される。A担任（初任保育者）は講師１年目で初任者研修の対象者ではないが，今回の大学教員と同僚教員の関わりは初任者研修における指導教員と校内指導教員の役割に近い働きであった。また，今回の研究で行われた「振り返りレポート」「指導略案と個別表の作成」は，初任者研修で実施されている「研修ノート」や「指導案・通知表・所見の作成」と似ている取組であることから初任者にとって重要なものであると確認された。

また，取り組みの中でB教員やD主任が授業を行い，そこから重要なものを検討し，観察者と共に初任保育者が確認していく作業も有効であった。日頃から同僚教員の授業は観察してきたが，複数の教員と検討する機会がなかった。熟練者の教育活動を観察するだけでなく，検討会で観察の視点を確認していくことで初任保育者にとって指導の要点が明らかになった。

これにより初任者研修のプログラムにおいて，初任者自身の理解度を複数の教員で確認しながら進めていく振り返りが重要であると示唆される。

今回用いたアクションリサーチは実践における問題を認識し，解決に向けて改善を行う過程に意味を置いて進めてきた。本研究で提示された要点をふまえながら今後も，初任教員においては「振り返り」を大切に「保育の質」の理解がどこまでできているのか自他ともに確認しながら進めていくことが大切

となり，周囲の教員が授業者に関わりながら授業研　　が望まれる。
究を進め，検討を行いながら実践していく積み重ね

引用文献・参考文献

１）木原俊行（2009）「なぜ『授業研究』は必要なのか」体育科教育　57（9）：10-13
２）「教育基本法」第二章（教員）第九条
３）「教育公務員特例法」第４章　研修　第21条
４）文部科学省中央教育審議会（2012）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」
５）香川県教育センター（2013）「平成25年度調査研究報告書　達人が伝授‼」
６）中村映子（2017）「小学校若手教員の学級経営改善のためのアクション・リサーチの意義と可能性：職能発達を促進する機能に着目して」
７）島田希（2008）「アクション・リサーチによる授業研究に関する方法論的考察」
８）國武恵（2014）「人間関係づくり授業における現場教師とファシリテーターとの協働性に関するアクションリサーチ」
９）末吉雄二（2015）「校長によるアクション・リサーチの手法を用いた若手教員の育成―小学校高学年の学級経営に焦点化して―」
10）西村由佳（2017）「小学校における初任家庭科教員が直面する困難克服プロセスの検討」